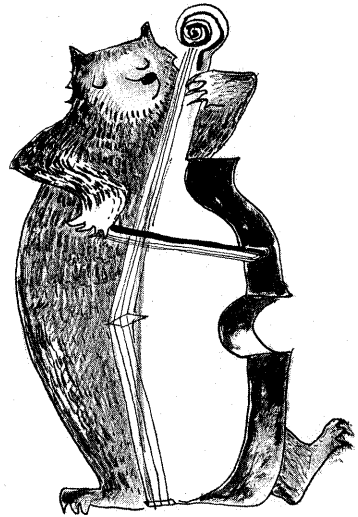


## 幼児の笑いとその保育における意味(2)

### 二歳児の笑い

友定 啓子



#### 一、おかしさと笑い

笑いに関する研究は、一八九九年にあの有名なベルグソンの「笑い―おかしみの意義についての試論」が発表されて以来、百年近くの歴史をもっている。その中でもっとも多く論ぜられてきたことは「おかしさ」の分析であった。「おかしさ」を構成する要素の分析が、さまざまな文学・芸術作品や、日常の人間行動の観察に基づいてなされてきたのである。

しかし、私は一歳児の観察をしていて、「おかしさ」に基づく笑いにはほとんど出会わなかった。笑いの現象

はたくさん見ているわけであるから、一歳児の場合は「おかしさ」は笑いの主原因ではないということになる。

ところが二歳児になって、子どもたちが人間関係において笑いを自由に使いだすようになるとともに、この「おかしさ」に基づく笑いも少数ながらみられるようになったのである。

#### △記録1▽

G子がコップを落とした。それを拾おうとして、いすの下に手をのぼすと、コップがころがっていくのが見え、「アハハハッ」とはじけるように笑う。(一九八六・一〇・二二)

△記録1▽では、子どもの中に「コップは動かない」という概念があり、それに反して、コップがまるで生き物のように、ころころと動いていったことが意外だったのである。またこの子どもは三歳の時に、先生が外でころんだのを見て「ウフフッ、先生が回った」と報告

してきた。ここにも「先生はころばない」という概念図式が成立していることを見ることができるといえる。

このように「おかしさ」がわかるためには一定の概念枠組すなわち「図式」が必要になってくるのである。そしてその図式をもとに目の前で起こっている事柄とのずれを瞬時に認識できなければならない。かなり知的な理解力が必要になってくる。一歳児に「おかしさ」に起因する笑いがほとんど見られないことはこれに関連していると思われる。一歳児は図式をそれほど持っていないし、どちらかといえば図式を獲得し作動させることの方が課題である。「わかること」「受け入れること」にともなう笑いのほうが主流である。ただし身体的な図式についてのずれはキャッチすることができる。

二歳児でもこの知的な概念図式のずれに対応する笑いはいまだ主流を占めてはいない。もう少し、自分との関わりのあるところでの「ずれ」に反応しているように見える。例えば次のようなものである。

〈記録2〉

先生が紙テープを二メートルほどに切って、子ども達のズボンにつけていく。しっぽのようである。二、三人の子がつけてもらっているのを見て、

B夫「なんだー？　なんだー？　なんだって？　なにあれ、

だーっ。」とはじけるような調子で言う。

M夫「ハハハッ、ハハハッ」

B夫「おもしろいなー、しっぽ！」

二、三人の子がつけてもらおうとならんでいる。A夫が身を乗り出して「ほくもー！」と言って加わる。つけてもらった女兒は恥ずかしそうにニヤニヤ笑いながら立っている。

先生「M夫ー、おいでー」

M夫「やんー、ハハハッ。なんだあー、こいよおまえも。B

夫くんもこいよー」と言いながら行く。

先生「B夫ー」

B夫、ニッと笑って「なに、なに、ちよっと、なんだよー！

なんだあれ、なんだあ？　なに、これ？」

と抵抗を示しながらも先生のところへ行く。つけてもらいな

がら、肩をすくめて「ウフッ、なんだこれ？　なんだ？」

先生「B子ちゃん」

B子「うわあ」

と驚いたような声を出す。B子、F夫もつけてもらい、自分の後ろを気にしながら、恥ずかしそうに歩く。B夫もてれくさそうにI夫と「なにこれ？　なにこれ？」と言っている。

G夫は名前を呼ばれて、弾むようにして先生のところへ行く。

そうこうするうちに結局ほとんどの子どもがつけてもらい、てんでに動きだしている。B子はしっぽを引きずりながら走り回り「ねずみ」と言う。A夫は自分の後ろを見ようとするが見えないので、鏡のところへ言って伸びをして見ている。C子はいそいそとしっぽを引きずって走り回る。F子「ねこ」と言いながら動く。M夫「しっぽがはずれてるよ」と人に言う。女兒三人がしっぽつきで楽しそうにかけまわる。B夫が観察者のところへやってきて「走るとしっぽがタガタふるえるよ、見て」とニコニコニコッとうれしそうに

言い、観察者に走って見せてくれる。しっぽの先端がひらひ

らとゆれる。観察者が「あー、ほんとね!」と言うと、にっこり笑う。

そういうみんなの様子を見ながらも、D子は「いや」といつてつけない。真剣な表情で全く笑わない。H夫もつけない。床にうつぶせにしながら、指をしゃぶっている。

(一九八七・二・四)

「しっぽをつける」というのは、それによって動物に変身することになり、かなり複雑な感情を引き起こす。

「おもしろそう、やってみたい」という気持ちになることもあれば、反対に「そんなこととんでもない」ということもあるし「何だかしらないけど、やってみるか」ということもあるだろう。つまり、自分が変化していくことに対する構えの違いなのだと思う。私は、B夫の何度も繰り返される「なんだあれ?」のくすぐったそうな声の中に、「おもしろそうだ」という気持ちと「いやだ」という気持ちの相反する二つの感情を感じて、このあと彼がどう行動するかを興味を持って見ていた。結局彼は

抵抗感を示しつつもその変身を受け入れていったわけだが、これとよく似た反応をしたのが、M夫とB子である。この子たちはクラスの中でも、自己意識が見える子たちである。つまり、先生や周りの人からの働きかけに対して、自分としての気持ちを示す子たちである。その一方で余り抵抗を示さず、むしろ喜んでしっぽをつけてもらう子たちもいる。それと全く反対の反応がD子とH夫である。この二人はこの時期不安定であった。とても変身を受け入れるどころではなく、必死で拒否している。

## 二、とぼけること、ふざけること

自分を関わらせているということで、二歳児で目立ったことは「とぼける」「ふざける」という行動である。それには笑顔がたいい付随している。

## △記録3▽

♪あなたのお名前は…♪という歌に合わせて、自分の名前

を答える歌遊びをする。F子は自分の番の時、目は上目、すぼめた口から舌を出して、とぼけた顔を作りやり過ごす。

(一九八六・五・七)

〈記録4〉

G夫、出席をとる時名前を呼ばれても、知らんぷりをして横を向く。E夫が、G夫を指差して「あそこにおるよ、ここにおる」という。G夫、ニーツと笑う。

(一九八六・六・一一)

〈記録5〉

「ごちそうさまの時、先生に「F夫君、パチンは？(手を合わせること)」と言われるが、F夫は下をむいてニヤニヤ笑ってやらない。みんなの「ごちそうさまでした」のあいさつがすんだとき、自分もさっと手を合わせ、おじぎする。

(一九八六・七・二三)

〈記録3〉はF子の例であるが、D子も出席をとると



き、自分の番になると返事をしないで、かわりにこの顔をする。私たちはこれを「とぼけている」とか「ふざけている」というようにとっていたのだが、どうもそれで

は不十分のようである。どの子にもこういうときがあるようだ。期待される行動はわかってはいるけれども、それはしたくない、そうすることで自分が変質していくことを直感的に感じ取っているのではないだろうか。相手に期待される自分とそれをしたくない自分、そのずれを感じ取っているのだと思う。そのずれを引き受けていることが「とぼけ顔」や笑顔になつてくるのだろう。この「とぼけ」は人を笑わせようとしているのではなく、自分に向けられた「とぼけ」である。

そしてこの「とぼけ顔」がだんだん消えていく。

#### △記録6▽

F子、歌に合わせて名前を答え、先生にほめられたあと、いすに腰かけて両足を上げ、それを両手で支えて打ち合わせる。  
(一九八六・六・二五)

#### △記録7▽

F子、歌が始まり自分の番を待ち構えている。まさに自分

の名前が呼ばれそうな時に、小さい組の子が自分のそばにやって来た。F子はその子を手で押しのける。一生懸命歌を聞いて、待ちかねたようにタイミングを合わせて「○○F子」と答える。先生に「あつ、すごいね」とほめられて、下をむいて足を二、三度バタバタさせて、うれしそうにする。  
(一九八六・七・二)

F子は、先生の歌に合わせて名前を答えることに決めたようだ。一生懸命歌に集中し、やっと答える。先生にほめられてうれしい、同時に恥ずかしい。そのように変化した自分をとらえているのだと思う。恥ずかしいとは他者に対して恥ずかしいのではなく、この場合自分に対して恥ずかしいのだと思う。△記録7▽では、タイミング悪くそばにやって来た子をおしのける。その真剣さが非常に印象的であった。それほどに自分の名前を答えることに自分をかけていたのだと思う。

#### 三、他者の目をおした自己意識

前の記録もそうだが、この時期の笑いは子どもたちの自己意識に関連していることが多いように思う。それは二歳から三歳という時期が「自我」の形成期であることに関連しているようである。エリクソンは自我同一性（アンデンティティ）の形成過程を自分と社会の接点における自我の葛藤を克服する過程としてとらえた。私は、まさにこの「自分と社会との接点」をこの時期の子どもたちがとらえ始め、それを統合するという自我の機能が笑い（笑顔）という形に表れているのではないかと思う。

#### △記録8▽

C夫、G夫とだき合って歩く。他の子どもにもつまづいてころぶ。C夫は起き上がり、観察者に気づいてニコツとする。

(一九八六・一〇・二二)

#### △記録9▽

F子、寝ている女兒のほおをおそるおそるなでる。何回か

繰り返した後に、それを見ていた観察者に気づきニコツと笑う。  
(一九八六・五・七)

この二つの記録は全く同じ対人構造を持っている。前の記録は失敗を人に見られた。後のほうは失敗とは言えないがやはり見られている。自分の行為を人に見られたことに気づいた時に笑顔が出るのである。「人に見られる自分」とは社会的評価を受ける自分である。自分が感じる自分の他にもうひとつの自分があることに気づいている。その二者を統合する働きがこの笑顔である。

#### △記録10▽

B子が遠くから「D子ー、きてもいいよー、こっちに」と叫ぶ。D子はそれに答えて、「オーイ」と返事をする。観察者がそれを聞いてニコツと笑うと、D子がそれに気づいて「バカッ」と怒ったように言う。  
(一九八七・一・二二)

私が思わずニコツとしたのは、この子が他の子どももの

働きかけにこんなにやわらかく反応するのが珍しかったからだ。けれどD子はそんな自分を人に見られたいなかった。まだ自分の変化を自分で受け入れられていなかったのだと思う。その不安定な自分を守らなければならず、それが「バカッ」という反撃の言葉になったのだろう。

### △記録11▽

G夫、私の前へトーンとかけだしてきて「キヤーツ」と言いながら、畳のところへすべり込み、ころんで見せる。観察者をニコッと見ながら「すべっちゃった」と言う。

(一九八六・一一・二五)

これは、ほとんど見られる自分を意識しての行為である。観察者が笑ってくれるのを期待しているのである。いろんなことができる自分、そしてそのことで周りにも受け入れられる自分、つまり自己と社会の統合を確かめているのであろう。

二歳児はさまざまな形で自分を認識し始めていく時期であることが笑いを手がかりにしても認められる。

(山口大学)

### 参考文献

1. E・H・エリクソン著、小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房、一九七三
2. E・H・エリクソン著、仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房、一九七七
3. 津守真『自我の芽ばえ』岩波書店、一九八四

